ポイマンドレス

「三重に大いなる者ヘルメス」第二巻

ジョージ ロバート ストウ ミード(千八百六十三〜千九百三十三)

第一章「ヘルメス文書」

「ポイマンドレス」または「人という羊の羊飼い」

偶然、私ヘルメスの心が「存在するもの」について熟考していた、ある時、私ヘルメスの思考は大いなる高みにまで高まり、私ヘルメスの肉体の感覚は抑制された。

ちょうど、食べ物に満ち足りた後や、肉体の疲労から、眠って、肉体の感覚が抑制された人のように。

虚空よりも大いなる、全ての限界を超越している大いなる存在(である神)が、私ヘルメスの名前を呼び、「あなたヘルメスは何を見聞きしたいと望んでいるのですか？　あなたヘルメスは何を学んで知りたいと思っているのですか？」と話したように、私ヘルメスには思われた。

私ヘルメスは、「あなたは誰ですか？」と話した。

彼(、神)は、「私は、人という羊の羊飼い(である神)、全ての達道者の精神(である神)である。私は、あなたヘルメスが何を望んでいるのか知ってい

ます。また、私は全ての場所で、あなたヘルメスと共にいます(。私は遍在している)」と話した。

私ヘルメスは、「私ヘルメスは『存在するもの』について学び、『存在するもの』の性質を理解し、神について知りたい、と切望しています。私ヘルメスが話した、それが、私ヘルメスが聞きたいと熱望している事です」と応じた。

神は、「あなたヘルメスが知りたいと望んでいる全ての事を、あなたヘルメスの心に抱(いだ)きなさい。そうすれば、私は、あなたヘルメスに教えるつもりである」と私ヘルメスに答えてくれた。

前述の言葉と共に、神の様子が変わった。

すぐに、瞬く間に、全てのものが私ヘルメスに開示されて、私ヘルメスは無限の幻視を見た。

全てのものは、光に変わった。甘美な喜ばしい光にである。

そして、私ヘルメスは、光を凝視しながら、忘我状態に成った。

しかし、少し時間が経つと、畏敬するべき憂鬱な、闇が、光の一部に堕天して来て、波状に、螺旋状に、とぐろを巻いた。

そのため、闇は蛇のようである、と私ヘルメスには思われた。

それから、闇は、ある種の湿気(、蒸気)のような力に変わった。

闇は、火から出るような煙を出して、全く言い表せない悲しい音で唸(うな)って、言葉の全ての力を超越して言い表せないほど、のたうちまわった。

その後、闇は、まるで火の元素の音のような、言い表せない叫びを出した。

闇の力の上に、光から、神の言葉ロゴスが降臨した。

すると、湿気(、蒸気)のような力から高みへ、上へ、純粋な火の元素が飛び上がった。

火の元素は、軽快で、迅速で自発的でもあった。

風の元素も、軽快なので、純粋な火の元素の後に従った。

風の元素は、土の元素と、水の元素から、火の元素へと上昇した。

そのため、風の元素は、火の元素から吊られたように見えた。

土の元素と、水の元素は、混ざり合ったままであったので、水の元素から、土の元素を区別できなかった。

しかし、霊の言葉ロゴスが、土の元素と、水の元素に浸透していたので、土の元素と、水の元素は、聞く耳を持っていた。

その時、人という羊の羊飼いである神は、私ヘルメスに「この幻視が何を意味するか理解しましたか？」と話した。

「いいえ。わかりません」と私ヘルメスは話した。

神は、「光は、私、あなたヘルメスの神であり、精神であり、闇から現れた湿気(、蒸気)のような力よりも前に存在するものである」と話した。

神「精神から現れた、光の言葉ロゴスは、神の息子(、イエス)である」

「それは何でしょうか？」と私ヘルメスは話した。

神「あなたヘルメスの中で見聞きするものは、主である神の言葉ロゴスである、と知りなさい」

神「実は、精神とは、父である神なのである」

神「父である神と、神の言葉(、イエス)は、分断できない」

神「父である神と、神の言葉(、イエス)の結合が、命を存在させているのである」

「あなた、神に感謝いたします」と私ヘルメスは話した。

神は、「そのため、光を理解しなさい。そして、光と友に成りなさい」と応じた。

そして、前述のように話すと、神が長い間、私ヘルメスの目を見つめたので、私ヘルメスは、神からの視線に身を震わせました。

神が顔を上げると、私ヘルメスは心の中に光を見た。

さて、無数の諸力によって、世界は全ての限界を超越して成長し、火の元素は最強の唯一の力に包囲され、従って、休息した。

私ヘルメスは、前記を見ると、人という羊の羊飼いである神の言葉ロゴスによって理解できた。

私ヘルメスが大いに驚くと、神は、次のように、私ヘルメスに再び話した。

神「あなたヘルメスは心の中で、創世より前から存在し終わりが無い原型の形を見ました」

前述のように、人という羊の羊飼いである神は、私ヘルメスに話した。

私ヘルメスは「それでは、どこから、力による四大元素は、存在してくるのでしょうか？」と話した。

前述の質問に、神は、「神意からである」と答えてくれた。

神「力は、神の言葉ロゴスを受け取って、美しい世界を見つめて、力による四大元素によって、また、諸々の魂の創造によって、力自身を世界に再現して、世界を模倣した」

神「精神である神は、男性性と女性性の両方が有るので、光として、また、存在する命として、物質に形をもたらすために別の精神を創造した」

神「神は、火の元素の神であり、霊の神であるので、七人の統治者(である七惑星の霊)を形成した」

神「七人の統治者(である七惑星の霊)は、感覚が知覚できる物質世界を囲んでいる」

神「人々は、七人の統治者(である七惑星の霊)による統治を『運命』と呼んでいる」

神「すぐに、神の理性ロゴスは、降下する四大元素から、力による純粋な形成へ飛び上がって、形成する精神である神と一体化した」

神「なぜなら、神の理性ロゴスは、形成する精神である神と、本(もと)から一体化しているからである」

神「このため、力による降下する四大元素は、理性を喪失したので、純粋な物質と成ってしまった」

神「神の理性ロゴスと一体化している、形成する精神である神は、球体である諸天体を包囲して、神による回転によって諸天体を回転させて、神が形成している万物を回転させて、遥かな創世から遥かな終末まで万物を回転させている」

神「精神である神の神意に従って、球体である諸天体の循環は、終わりから始まるからである」

神「降下する四大元素から、力は、理性の無い諸々の命を創造した」

神「なぜなら、神は、理性ロゴスを、理性の無い諸々の命にもたらさなかったからである」

神「風の元素は、翼が有る者達を創造した」

神「水の元素は、泳ぐ者達を創造した」

神「精神である神の神意に従って、土の元素と、水の元素は、分かれた」

神「土の元素は、土の元素の懐から、四本足を持つ諸々の命、爬虫類(はちゅうるい)、野生の獣、家畜を創造した」

神「万物の父である精神である神は、命であり、光であって、神自身に似せて人を創造した」

神「神は、人を、神の子であるかのように、愛した」
神「なぜなら、人は、無双に美しく、人の父である神の姿に似ていたからである」
神「真に、神は、神自身の形である人を愛した」
神「神は、神自身の形成力の全てを、人に与えた」
神「人は、父である神の中で、形成するものが創造したものを見つめて、人も、『形成したい』と望んだ」
神「そのため、父である神は、人に承認を与えた」
神「人は、自身の状態を創造する球体である天体に変えて人の全ての権力を得て、人の兄弟である諸々の被造物を見つめた」
神「諸々の被造物は人を愛して、統治を人と共有した」
神「人は、諸々の被造物の真髄を良く学び、諸々の被造物の性質を共有する者と成った後、諸々の被造物の領域を克服して、火の元素を圧倒している力を統治したい、という考えを持った」
神「そのため、世界の中の全ての死に至る被造物達、理性の無い諸々の命を統治する力の全てを持っている、人は、調和によって、下を向いて、下の力を克服して、神の美しい形を下に現した」
神「下の力である女性は、決して飽きるはずが無い美の形と、神の形と七人の統治者(である七惑星の霊)全ての力を自身の中に所有している人を見て、愛して微笑んだ」
神「なぜなら、下の力である女性は、女性の水の元素に、人の最も美しい形の映像を見たようであったし、女性の土の元素に、人の影を見たようであった、からである」

神「男性である人も、女性の水の元素に、女性の中に存在している男性自身に似ている形を見て、女性を愛して、女性と暮らしたいと望んだ」

神「意思は行動と成る。そのため、人は、命を理性の無い形に与えた」

神「力である女性は、女性の愛の対象である男性である人をとらえて、女性自身を男性である人に完全にからみつけて、男性である人と、女性は性交した。なぜなら、男性である人と、女性は恋人に成ったからである」

神「このため、地上の全ての被造物よりも、人は二重なのである」

神「人は、肉体のせいで死に至るが、本来は不死、不滅なのである」

神「人は、本来は不死で万物を統治する力を所有しているが、死に至る被造物達のように苦痛を受けてしまうし、運命に従ってしまう」

神「このように、人は、調和を超越しているが、調和の中にいて、奴隷と成ってしまっている」

神「人は、男性性と女性性が有る父である神から創造されていても、男性でも女性でも、眠る必要が無い父である神から創造されていても、眠気に圧倒されてしまう」

私ヘルメスは、「それについて、教えを続けてください。おおっ、私ヘルメスの精神である神よ、なぜなら、私ヘルメスも神の言葉ロゴス(である神の知)を愛する者(である哲学者)だからです」と話した。

羊飼いである神は「それは、この日まで隠されていた神秘なのです」と話した。

神「人が抱いた力は、不思議を創造した。おおっ、とても不思議である」

神「既に私、神が、あなたヘルメスに話したように、なぜなら、人には、火の元素と霊から創造した七つの統治力を調和させる性質が有ったからである」

神「力である女性は、すぐに、男性性と女性性が有り大気を動かしている七つの統治力に対応している、七人の『人』を創造した」

私ヘルメスは「それについて、教えてください。おおっ、羊飼いである神よ……」と話した。

ヘルメス「なぜなら、今、私ヘルメスは、大いなる熱望に満たされて聞きたいと切望しています」

ヘルメス「避けず、話してください」

羊飼いである神は「沈黙を保持しなさい。なぜなら、私、神は、最初の話であるロゴスをあなたヘルメスに未だ明らかにしていないからである」と話した。

私ヘルメスは「おおっ！　私ヘルメスは沈黙いたします」と話した。

神「既に私、神が話したように、そのように、七人の人の創造が実現された」

神「土の元素は女性のようであった。水の元素は憧れに満ちた」

神「女性は、火の元素から成熟を得たし、光の媒体である第五元素のエーテルから精神を得た」

神「このように、力である女性は、男性である人の形に合う仕組みを創造した」

神「そうして、男性である人は、命を魂に、光を精神に、変えた」

神「このようにして、終わりと新たな始まりの時代の間に、感覚世界の全部にまで及びました」

神「さて、あなたヘルメスが聞きたいと切望していた、残りの話であるロゴスを聴きなさい」

神「前述の時代が終わると、神意は、男性と女性を結びつけていた絆を全て、ほどきました」

神「なぜなら、男性性と女性性が有る動物の全てを、同時に、人から分けたからである」

神「ある者達は形的に部分的に男性性だけに成り、別の者達は同様に形的に部分的に女性性だけに成った」

神「そうして、すぐに、神は、神の言葉ロゴスによって、次のように、話した」

神「産めよ、増えよ、あなた達、全ての被造物よ。また、内に精神を持つ人は、『人は不死であり、愛は全てであり、死に至る原因は愛である』と知るために学びなさい」

神「神が前述のように話すと、人の先見の明は、運命と調和によって、男性と女性の結びつきと、男性と女性による創造の基礎を達成した」

神「そうして、万物は、種類に従って、増えた」

神「また、こうして、自身を知るために学んだ人は、多数を超越している善に到達した」

神「しかし、迷いに至る愛着によって愛を肉体に浪費してしまう人は、闇をさまよう状態に留まってしまって、感覚を通じて死の苦しみを味わってしまう」

私ヘルメスは「なぜ、無知な人は、不死を奪われてしまうほど大いに悪事を犯してしまうのでしょうか？」と話した。

神は、「おおっ、あなたヘルメスよ、あなたは注意して聞いていなかったようですね」と話した。

神「私、神は、あなたヘルメスに考えるように指示しませんでしたか？」

ヘルメス「はい、私ヘルメスは考えております。また、私ヘルメスは(神の指示を)覚えております。そのため、あなた神に感謝しております」

神は、「もし、あなたヘルメスが次の事について考えたら、私、神に話しなさい。『なぜ、死の状態にいる人は、死ぬのが相応しいのか？』」と話した。

ヘルメス「なぜなら、憂鬱な闇は、物質的な仕組みの根源であり基礎である、からです」

ヘルメス「闇から、湿気(、蒸気)のような力が創造されたのである」

ヘルメス「この湿気(、蒸気)のような力から、感覚世界における肉体は構成されている」

ヘルメス「そして、この肉体から、死は、水の元素を徐々に失わせるのである」

神「おおっ、あなたヘルメスよ、あなたの考えは正しい！　では、神の言葉ロゴスが話したように、なぜ、『自身を知る人は、神に近づく』のか？」

私ヘルメスは、「普遍の父である神は、光と命で構成されています。そして、神から、人は創造されました」と答えた。

神「あなたヘルメスは良くぞ話しました。あなたヘルメスが話したように、光と命は父である神である。そして、神から、人は創造されました」

神「そのため、あなた達、人が、もし『私、人は、光と命である』と学んでいれば、偶然、光と命から外れても、命に再び戻るであろう」

前述のように、人という羊の羊飼いである神は話した。

私ヘルメスは、「私ヘルメスに更に教えてください、私ヘルメスの精神である神よ。どのようにしたら、私は命に再び戻れるのでしょうか？」と叫びました。

ヘルメス「なぜなら、神は、『精神を内に抱いている人は、人は不死である、と知るために学びなさい』と話しました」

ヘルメス「それでは、全ての人が精神を抱いている訳ではない、という事なのでしょうか？」

神「おおっ、あなたヘルメスよ、あなたは良くぞ話しました。あなたヘルメスが話したように、私、神である精神は、神聖な人達、善人達、清浄で思いやり深い人達、信心深い生き方をしている人達と共にいるのである」

神「神聖な人達、善人達、清浄で思いやり深い人達、信心深い生き方をしている人達には、私、神である精神の存在は、助けと成る」

神「すぐに、神聖な人達、善人達、清浄で思いやり深い人達、信心深い生き方をしている人達は、万物の認知を得るし、清浄な生き方によって父である神の愛を勝ち取るし、神に感謝するし、神に加護を祈るし、賛美歌を歌うし、神への激しい熱烈な愛に夢中に成る」

神「神聖な人達、善人達、清浄で思いやり深い人達、信心深い生き方をしている人達は、肉体を肉体に固有の死に至らしめる前に、『肉体がもたらす結果が、どのような代物であるか？』という知から嫌悪して肉体の感覚から遠ざかる」

神「いや、肉体に降りかかる結果を許さないのは、肉体の自然な終末に至るのを許さないのは、私、神である精神なのである」

神「門番として、私、神である精神は、全ての(感覚という)入口を閉ざして、下劣な邪悪な力がもたらす精神的な動きを断ち切るのである」

神「心無い者ども、邪悪な腐敗した堕落した者ども、嫉妬深く貪欲な者ども、殺人を犯して不信心な者どもには、私、神である精神は遠ざかるし、人の中で精神が在るべき場所を、報復する半神半霊ダイモーンに譲る」

神「報復する半神半霊ダイモーンは、火の元素を激しくするし、悪人を苦しめるし、悪人の上の火に火を加えるし、感覚を通じて悪人に襲いかかる」

神「このようにして、悪人に、法に対する罪への用意をさせる」

神「そのため、悪人は、大いなる苦しみに遭う」

神「悪人は、常に過度に欲望するし、満足せずに闇の中で争う」

ヘルメス「おおっ、精神である神よ、私ヘルメスが望んだ通りに、あなた、神は、全てについて良く教えてくれました」

ヘルメス「さて、願わくば、今の私ヘルメスにとっての神への道の摂理について、更に私ヘルメスに教えてください」

前述の私ヘルメスの質問に対して、人という羊の羊飼いである神は、「あなたの物質的な肉体が分解される時に、まず、あなたは肉体を変化という動きに任せる。このようにして、あなたが所有していた(肉体という)形は無くなる。このようにして、あなたは、力が無く成った命の手段を半神半霊ダイモーンに任せる」と話した。

神「次に、肉体の感覚は、分離して、肉体の感覚の源泉に戻って、諸力として復活する」

神「そして、肉欲は、理性の無い力に戻る」

神「その後、人は、調和を通じて、速やかに、神への道を上昇する」

神「第一の地帯に、人は、成長や衰弱の力(、向上や堕落の力である意思力)を返す」

神「第二の地帯に、人は、悪による工夫(、悪い、考える力)を奪われる」

神「第三の地帯に、人は、肉欲に対する悪賢さ(、悪い、知力)を奪われる」

神「第四の地帯に、人は、傲慢さを奪われる」

神「第五の地帯に、人は、不信心な無謀な大胆さを奪われる」

神「第六の地帯に、人は、邪悪な方法による富を増やすための努力を奪われる」

神「第七の地帯に、人は、罠にかけるための嘘を奪われる」

神「調和により力をもたらす全ての物が、人から奪われて、人の本来の力を衣として纏(まと)って、人は、第八の地帯の物である力に到達して、第八の地帯で、第八の地帯にいる者達と共に、父である神を賛美歌で、たたえる」

神「第八の地帯にいる者達は、人による第八の地帯への到来を喜んで迎える」

神「人は、第八の地帯にいる者達と似た者と成ると、第八の地帯の物である力を超越している諸力である者達(である神の分身である神の聖霊である天使達)が自分の言葉で神をたたえる歌を歌っているのを更に聞く」

神「そして、第八の地帯に一時的にいる者達は、一集団と成って、父である神の家に到達する」

神「第八の地帯に一時的にいた者達は、自ら、諸力である者達(である神の分身である神の聖霊である天使達)に自身を任せる。このようにして、第八の地帯に一時的にいた者達は、諸力である者達(である神の分身である神の聖霊である天使達)と成って、神の中に存在する事に成るのである」

神「前述が、神と一体化するための認知を得た人達のための善い結末なのである」

神「では、なぜ、あなたヘルメスは、(知を広めるのを)遅らせているのか?」

神「あなたヘルメスは(神からの知を)全て受け取ったのだから、死に至る人達が、あなたヘルメスを通じて神に救われるように、あなたヘルメスは相応しい人達に神への道を教えるべきである。そうではないか?」

人という羊の羊飼いである神は、前述のように話すと、諸力である者達(である神の分身である神の聖霊である天使達)と一体化した。

実に、私ヘルメスは、普遍の父である神への感謝と祈りと共に、自由へと解放され、神が私ヘルメスに注いでくれた力に満ちて、万物の性質と最高の幻視についての神の教え(である知)に満ちた。

そして、私ヘルメスは、信心と認知の美しさについて、人々に説き始めた。

ヘルメス「おおっ、あなた達、人よ、地上に創造された人達よ、酒と眠りと神についての無知にふけっていた人達よ、今こそ酩酊から目を覚ましなさい！　過食をやめなさい！　理性の無い非論理的な眠りに夢中になるのをやめなさい！」

(ヘルメスの教えを)聞いた人達は、こぞって、やって来た。

すると、私ヘルメスは、「あなた達、地上に創造された人達よ、なぜ、あなた達は、不死を共有するための力を持ちながら、自身を死に任せてしまうのか？」と話した。

ヘルメス「悔い改めよ、おおっ、あなた達、人よ、過ち(あやま)と共に腕を組んで歩む者達よ、無知を食べ物として共有してしまっている者達よ」

ヘルメス「『闇からの光』から解脱して、不死に加わり、破滅をやめなさい！」

人々のうち、ある者どもは、私ヘルメスを笑いものにしてしまって、私ヘルメスから離れてしまい、死に至る道にふけってしまった。

(しかし、)他の人達は、私ヘルメスの足元に平伏して、私ヘルメスの教えを請い求めた。

私ヘルメスは、平伏した人達を立ち上がらせて、「どのようにしたら救われるのか？」という(神の)言葉ロゴスを教えて、神の家へ至る人達の指導者と成った。(英訳原文の「Ｌｏｇｏｉ」は「Ｌｏｇｏｓ」の複数形である。)

私ヘルメスは、人々の中に、知の言葉ロゴスという種をまいた。

(私ヘルメスは、)不死の水を飲ませた。

そうして、夕方に成って、太陽の全ての光線が(地平線に)沈み始めると、私ヘルメスは、全ての人達に、神に感謝するように命じた。

そして、人々は、神に感謝し終わると、各々、自分が安息できる場所へ戻っていった。

実に、私ヘルメスは、人という羊の羊飼いである神からの恩恵を心に刻み、私ヘルメスの全ての希望が満たされて、喜ぶ以上の爽快感を感じた。

なぜなら、(私ヘルメスは、)肉体の眠りが、魂の目覚めと成って、両目を閉じると、真実の幻視を見た。

私ヘルメスの沈黙は善を懐妊して、私ヘルメスが言葉(ロゴス)を話すと、善いものが創造された。

前述の全ては、私ヘルメスの精神である神、人という羊の羊飼いである神、全ての達道者による神の言葉ロゴスである神から、私ヘルメスにもたらされた物なのである。

神が吹き込んでくれた霊によって、私ヘルメスは、真理という平らな地に到達した。

そのため、私ヘルメスの全身全霊と全力で、私ヘルメスは、父である神に感謝いたします。

あなたは、聖なるかな、おおっ、神よ、普遍の父である神よ。

あなたは、聖なるかな、おおっ、神よ、神意は自力で神意自身を完成させ(実現させ)ます。
あなたは、聖なるかな、おおっ、神よ、神は、神の者達に、知られる事を望んで、知られます。
あなたは、聖なるかな、神は、神の言葉ロゴスによって、存在するものを創造しています。
あなたは、聖なるかな、自然の万物は神の姿に似せて創造されている。
あなたは、聖なるかな、自然の万物が神の形を創造した事は決して無い。
あなたは、聖なるかな、神は、全ての力よりも強い。
あなたは、聖なるかな、神は、全ての超越を超越している。
あなた、神は、神聖であり、全ての称賛よりも優れている。
心から、あなた、神へ永遠に伸ばしている、私ヘルメスの理性による純粋な捧げ物(である感謝)を受け取ってください。
おおっ、あなた、言い表せない神よ、言い表せない者である神よ、神の御名では駄目で、沈黙が表す事ができる者である神よ。
(神よ、)「認知を失くさないように」という私ヘルメスの祈りに耳を傾けてください。
認知(、知)は、存在の共通の性質である。(古代の賢者は知を畏敬して知の代わりに認知という言葉を用いた。)
神の力と、私ヘルメスが、光を、人について、私ヘルメスの兄弟について、神の子達について無知な人々にもたらす事ができる(知という)神の恩恵で、私ヘルメスを満たしてください。
神の力と知のために、私ヘルメスは、(神を)信じますし、(神について)証言します。

私ヘルメスは、命と光に到達しました。
あなた、神に感謝します、おおっ、父である神よ。
あなた、神が神聖であるように、神の人も神聖であるように。
なぜなら、あなた、神は、人に、存在するための神の全ての力を与えたからです。